

〈特集：台湾の図書館〉

## 台湾の図書館探訪

—国家図書館、台北市立図書館を中心に—

宇治郷 毅

### はじめに

本年（2008）年3月10日から18日にかけて台湾の国家図書館を中心に各種の図書館を見学した。私はこれまで、自分の研究（「日本統治期台湾の教育制度」）調査のため戦前の日本語資料を豊富に所蔵する「国立中央図書館台湾分館」「台湾大学図書館」はしばしば訪問している。また国家図書館は利用のため一度訪問したことがある。今回台湾の図書館事情を調査するために、短期間ではあったが「国家図書館」「国立中央図書館台湾分館」、「国立台中図書館」、「台北市立図書館」を見学した。時間の関係で台中の「国立台中図書館」を除くと他はすべて台北市に所在する図書館が対象となった。国家図書館では、附設の電子図書館である「資訊図書館」も見学した。また台北市立図書館では、本館に当たる「総館」と多くの分館のうちから「啓明分館」「民生分館」「三民分館」「大同分館」の4館を見学した。限られた時間であったが、各図書館で担当の職員から親切で丁寧な案内を受けた。特に国家図書館と二つの国立図書館では、各館長が多忙の中時間を割いて表敬に応じてくださったこと、また多くの職員が心から歓迎してくれたことは感謝にたえないことであった。

今回見学してみて、全体として台湾の図書館の活気に満ちた姿が印象的であった。もちろんいろんな問題をかかえていることもわかったが、各館がビジョンを鮮明にして、事業の重点を定め、職員が一体感をもって取り組んでいる姿がひしひしと伝わってきた。現在台湾の図書館は進展の速度、重点の置きどころは各館によって違うとはいえ、大きく言って次の四つの点で大きな変貌をとげつつある。

第一は、資料のデジタル（電子）化と遠隔利用サービスを中心としたサービス形態の変化である。特に国家図書館と二つの国立図書館では、従来からの館内における閲覧、貸出、レファレンスなどのサービスに加えて、所蔵資料のデジタル化を大規模に、ハイピッチで進めている。デジタル化の対象は、主に貴重な古典籍、図書、新聞雑誌、政府刊行物、「画像写真」・A/V（音声映像）資料などである。また国内外の図書館と協力して中国語の古典籍と日本統治時代の日本語資料のデジタル化を進めているのが印象に残った。デジタル化済みの資料は館のウェブサイトにてデータベース（デジタルコレクション）として即時に蓄積され、ホームページより国内外に情報発信されている。またドキュメントサプライ（文献提供）に関しても、「遠隔図書服務系統」という遠隔サービスサイトからデータベースにアクセスすることで一部はオンラインで又は一部は郵送などで原文入手が可能となっている。

第二は、グローバル化である。グローバルな視野に立った各種のサービスが拡張し、国際交流やエスニックグループへの多元化サービスも行われるようになってきている。情報の海外への発信は電子図書館の構築によって急速に実現しつつある。海外からの資料情報の入手も拡大しつつある。特に需要の多い中国語文献は中国から入手可能となっている。国外の図書館との交流や海外での国際会議への職員の積極的参加も奨励されている。各国の図書館人、学術研究者との交流や国際シンポジウムなどよく行われている。特に国家図書館は最近中国大陸の図書館界との各種の国際会議を通じた業務と人的交流を行っている。

第三は、「ローカル化」である。これは「本土化」という言葉でスローガン化されているが、台湾の民主化過程と平行して深化しつつある。いわば「台湾化」でもあり、台湾土着の資料の重視としてあらわれている。19世紀以前の歴史史料や日本統治期の各種資料、解放（光復）初期の各種資料の収集、デジタル化事業として力が入れている。国家図書館の「漢学研究センター」の充実や国立中央図書館台湾分館の「台湾学研究センター」の新設など目立った動きとして表れている。

第四は、徹底した「利用者本位」のサービス展開である。これはどの館にも見られることだが、特に台北市立図書館の各種のサービスの中に見出すこ

とができる。一般利用者の図書館へのアクセスの便宜を図るため分館建設や「智慧図書館」（自動化情報図書館）の増設への努力、開館時間の拡大、障害のある利用者への資料の宅配サービスなどどんどん新しいサービスが取り入れられていた。従来からある児童サービス、障害者サービスはますます重視されているし、昨年から「多文化サービス」も開始された。

## I. 図書館訪問

### 1. 国家図書館（National Central Library）

10月12日（水）、台北市中山南路20号にある国家図書館を訪問した。台北市の中心にあり、MR T（「台北捷運」）「中正紀念堂駅」のすぐ側にある。10時に黄寛重館長を表敬した。館長は「中央研究院歴史語言研究所」の研究員を兼ねる宋代歴史研究の著名な博士でもある。20分ほど国家図書館の将来展望について含蓄に富んだ話をいろいろお聞きした。中でも電子図書館の構築と情報発信に力を入れているとのこと、館のスペースがかなり手狭になってきていることが問題であるという話が印象的であった。表敬後、館内見学に移ったが、その前に館のデータベース検索とオンラインシステムのプレゼンテーションを一階の会議室で行ってくれた。これは予期せぬことであったが、あらかじめ「出版品国際交換処」の蘇桂枝主任が私のために準備してくれていたようであった。閲覧組の職員から、台湾の歴史的資料を電子化した「台湾記憶」（Taiwan Memory）と国内図書館総合目録データベースである「全国図書書目资讯网」の二つのサイトの詳しい説明を受けた。私の研究テーマが「石坂荘作」（日本統治期台湾の教育家）であることもあらかじめ調査済みであったようで、この人物について詳しく資料紹介をしてくれたのにも恐縮した。このプレゼンテーションを通じて、館が台湾古来の文献の重視と各種のシステム開発に邁進し、同時に情報分野での若い職員の育成に力を入れていることが理解できた。その後、館内見学に移り、一般閲覧室とこの図書館が世界に誇る中国語貴重書を収蔵した「善本書室」と台湾における漢学研究の一大センターである「漢学研究中心」を見学した。見学後、宋建成副館長主催の昼食会に出席した。副館長は清代歴史研究者であるが、台湾

図書館史にも造詣が深く、私の台湾図書館史関係の論文も読んでおられ、話が盛り上がったのも嬉しいことであった。筑波大学大学院留学経験のある林安琪（閲覧組日韓文室）氏には、終始通訳の労をとっていただいた。

「国家図書館附設資訊図書館」（National Central Library Information and Computing Library）は、11日午前訪問した。台北市和平東路2段106号13楼（科技大樓）にある。情報関係の図書雑誌、学位論文など豊富にあった。多くのパソコンが用意されていて、自由にオンライン・データベース、電子ジャーナル、マルチメディア資料、インターネット資源にアク



国家図書館黄寬重館長を表敬（中央左）筆者（中央右）



国家図書館・閲覧者入口



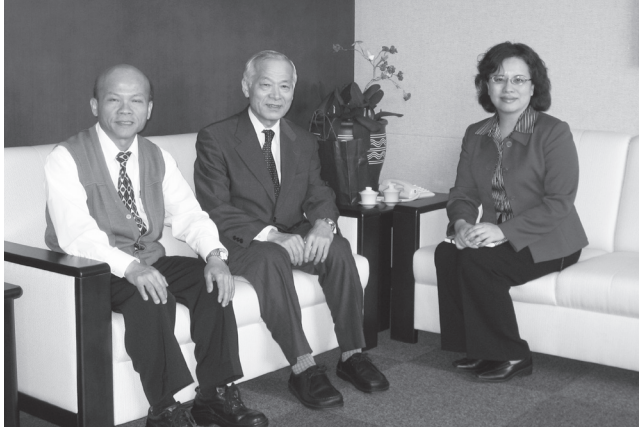
国家図書館附設資訊図書館・閲覧者入口

セスできるようになっていた。紹介なしの訪問であったが、職員から親切な対応を受けた。ここでは主に、国家図書館のe-ラーニングサービスである「国家図書館遠距学園」につき、担当の職員からプレゼンテーションを受けた。また「遠距学園」の各種課程の作成方法について詳しくお聞きした。一般向けだけでなく、全国の図書館員向けに最新知識とスキル提供のプログラムを常に開発、提供するようにしているという説明が印象に残った。

## 2. 国立中央図書館台湾分館 (National Taiwan Library)

3月11日午後1時、台北県中和市中安街85号にある国立中央図書館台湾分館を訪問した。台北駅から20分ほどでMR T「永安市場駅」に着く。駅から徒歩で5分、公園の一角にあり非常に明るく現代的な7階建の壮大な建物が目に飛びこんでくる。現在地には、2004年に移転してきたが、前身は日本統治時代の「台湾総督府図書館」（1914年創立）である。光復後、「台湾省行政長官公署図書館」「台湾省立台北図書館」をへて、1973年より現在の名称になった。この国立図書館は台湾でもっとも古い歴史を誇り、日本語資料が豊富なことで有名で、日本からの利用者も多い。現在「国立台湾図書館」への改変を進めている。国家機関の教育部に属し、根拠法規は「図書館法」で、「国立中央図書館台湾分館組織条例」「国立中央図書館台湾分館閲覧服務規則」などで組織や閲覧業務の中身が規定されている。館長の下に、採編組（収集と整理担当の課）、閲覧典藏組（図書の保管と利用）、参考服務組（レファレンスと各種主題目録作成）、推廣輔導組（調査、研究、統計、視察、広報、指導、協力）、総務組（庶務、文書、会計、物品管理）の構成になっている。この図書館のビジョンは、「人文と科学技術の融合」「ハードとソフトの充実」「本土と世界の連続化」「サービスと研究の両立」の四つの指標から成る。蔵書では、台湾資料、「親子資料」（児童書、育児書など）、視覚障害資料に特色をもっている。そのため台湾研究、親子研究、視覚障害研究に力点を置いた研究図書館をめざしている。

旧知の参考服務組の潘淑慧氏と館長秘書の何輝国氏が出迎えてくれた。早速に館長室に案内され、黄雯玲館長を表敬した。20分ほど2007年3月に設立された「台湾学研究中心（センター）」についてうかがう。特にその中心となっ



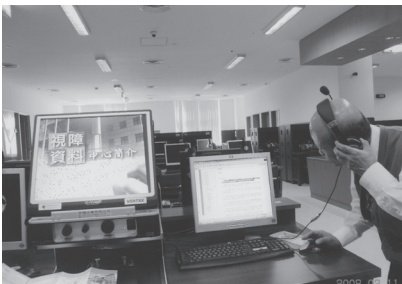
国立中央図書館台湾分館黄雯玲館長（右）を表彰  
中央は筆者、何輝国館長秘書（左）



国立中央図書館台湾分館正面



国立中央図書館台湾分館  
「親子資料センター」



国立中央図書館台湾分館  
「視障資料センター」



国立中央図書館台湾分館  
「台湾図書館医院・修復装丁室」

ている「台湾研究数位図書館（台湾研究デジタル図書館）」について今後の重点目標と抱負をうかがった。その後、この館が現在重点を置いている部門を中心に見学した。それらは「台湾学研究センター」「親子資料中心」（児童用資料センター）「視障資料中心」（視覚障害者資料センター）、「台湾図書館」であった。「台湾学研究センター」は、戦前の「台湾総督府図書館」旧蔵書と「南方資料館」旧蔵書の約20万冊を継承し、台湾で一、二を争う日本関係蔵書を有している。なかでも「台湾文献期刊論文索引」「台湾文献資料連合目録」「日文旧籍台湾文献資料連合目録」など台湾関係資料のデジタル化に力をそそいでいた。「親子資料中心」は玄関の直近の位置にあり、就学年令前の幼児の絵本や外国語の親子向け児童書が豊富にあった。外国語児童書は英語資料が大部分で日本語児童書がほとんど見当たらないのが残念であった。「視障資料中心（センター）」は1975年設立で、視覚障害者サービスでは台湾の公共図書館ではもっとも古い歴史があり、視覚障害者資料が豊富であり、設備も優れていた。点字図書、電子点字出版物、録音図書などを作成、提供していた。視覚障害者専用HPより最新の情報提供しており、実際の資料検索を見せていただいた。地下書庫で点字図書・録音資料書架と録音室を見学した。最後に、「台湾図書館」を見学した。この館は古い資料が多く、戦前より資料保存に力を入れているという伝統がある。資料保存では、台湾でもっとも優れた設備と技術を有していることで有名である。図書の修復をおこなう装丁室、虫害を防ぐ「冷凍除虫設備」、酸性紙対策の「除酸システム」、各種の修復器材、薬材などの説明を専任の職員から詳しく受けた。保存ということは、目に見えにくいところであるが、日頃の地道な努力がこの館の蔵書を守り、ひいては文化財を後世に伝えることにつながっているのを実感させられた。

### 3. 「国立台中図書館」（National Taichung Library）

3月15日、台北駅を11時に新幹線（「台湾高速鉄道」）に乗り、台中に向かう。1時間ほどで到着。新幹線の台中駅から市内までタクシーで20分ほどかかり少し距離がある。台中市精武路291之3号にある「国立台中図書館」には約束の2時前に着いたので、隣の台中公園を散策する。

国立台中図書館の前身は、1923年創立の「台中州立図書館」である。光復後、「台湾省立台中図書館」となり、台湾省政府教育庁に属したが、1999年行政院文化建設委員会に所属が移り、「国立台中図書館」に昇格した。この時から、全国公共図書館の指導、良好な閲覧環境、生涯学習のための市民への読書活動の展開などが館の目的として規定された。根拠法は、「図書館法」、「公共図書館設立及營運基準」と「国立台中図書館組織規定」(1999. 6. 29)である。

定刻副館長の鄭慕寧氏の出迎えを受け、早速楊宣勤館長を表敬した。話題は、「国立図書館」に昇格してからの役割の変化と新館建設についてであった。1時間ほど鄭副館長から、新聞閲覧室、雑誌閲覧室、児童閲覧室、参考閲覧室、各主題閲覧室、「日文旧籍閲覧室」などの一般読者サービス部門の案内



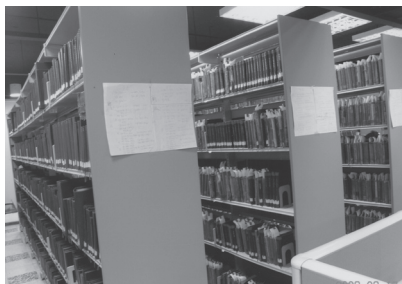
アメリカン・コーナー



インターネットサービスセンター



本館 (右)、中興堂演劇庁 (左)



日文旧籍書庫



を受けた。現在蔵書は約70万冊（点）であるという。また閲覧座席数は約860とのこと。現在この館は特色ある二つのサービス、つまり特殊資料に基づく閲覧サービスと教育文化活動に重点を置いているということで、引き続き1時間ほど担当職員より説明を受けた。まず前者の「米国資料中心」(American Corner)「留学資料中心」(Study Abroad Corner)「網路資源中心」(Internet Services Center)、「視聽媒体中心」(Multimedia Services Center)、「数位典藏」(Digital Archives)を詳しく見学した。この中で特に印象に残ったのは、「米国資料中心（センター）」と「数位典藏」（デジタル・アーカイブ）であった。前者は、この館が誇っている室の一つで、最新のアメリカ合衆国に関する図書、雑誌、地図、電子雑誌、DVD、ビデオの他、データベースやインターネットも使えるように整備されていた。アメリカの文化、社会に関するもの、英語学習に関するもの、留学に関する資料が多かった。この資料室を見学して現在の台湾の利用者が、海外情報の中でアメリカ情報を特に要求しているのがよく理解できた。学生を始めビジネスマンなどの利用が多いという。後者のデジタル・アーカイブは、主に台湾の文化遺産の保存と利用のためのオンライン保存システムとデータベースである。すでに三つのサイトが設置されていて、その中の「地方文献數位化系統」（地方文献デジタルシステム）と「歴史珍蔵e点通—典藏日治時期台湾研究資料」（歴史的貴重書オンライン・アクセス—日本統治時代の台湾研究資料）を実際の検索をして見せていただいた。ここでも地域文献の保存とデジタル化による利用に重点を置いているのがよく理解できた。最後に「視聽室」と「中興堂演劇庁」を見学。この館の教育文化活動は非常に活発であった。前者で映画会が、後者では音楽会、演劇、舞踏会、会議などが盛んに開催されているという説明を受けた。台湾の公共図書館は文化活動が盛んであるが、この国立図書館は特に活発である印象をうけた。見学後に、廊下に展示されているまことに斬新な新館（台中市五權南路與建成路口に建設予定）の模型について説明を受けた。新館ができたらぜひまた来てほしいという館長の言葉をいただき、館を後にした。

#### 4. 「台北市立図書館」(Taipei Public Library)

3月15日台北市立図書館を訪れた。台北市立図書館の「総館」(本館)は、台北市の大安区建国南路2段125号にあり、広大な大安森林公園のすぐ側にあり環境に恵まれている。また台北駅からもMR Tで20分、交通の便もよいので利用者の多いことでも知られている。歴史も古く、台湾の公共図書館のリーダー的な存在で、規模も大きく、活動も活発である。この図書館には、三つの特徴がある。一つは、多くの分館と本館が一体となって非常に有機的に機能していることである。第二は、各分館の特殊コレクションである。第三は、障害者サービス、多文化サービスを重視していることである。私は、これらを確かめるため5館を見学した。まず第一点であるが、台北市の12の行政区に2008年4月現在で本館と「分館」40館、「民衆閲覧室」(分館ほどの規模はもたない読書室)12館、「知恵図書館」(全システムが機械化されている図書館で現在内湖のデパートと西門の地下鉄駅構内にある)2館がある。全域的な企画・運営は本館が主導権をもって行うが、活動面では組織的にもシステム的にも一体となってまさに大きな「有機体」となって活動していることである。日本のような区立図書館はなく、すべてが台北市立図書館として、選書、相互貸借、レファレンスなど協力して全市民に図書館サービスを提供している。この図書館の小冊子には「台北市立図書館は成長する有機体である」と書かれているが、首肯できる。第二は、分館がそれぞれ「特色あるコレクション」(国内外のもの)を分担して責任をもって収集、所蔵していることである。それぞれの分館はよく利用される一般的な図書や新聞雑誌はそれぞれが共通して所蔵しているが、専門的な資料については他館にまかせ、必要な時には相互貸借するか、その図書館に利用者を案内するわけである。私は、3月12日、13日の二日をかけて「松山区」に所在する「三民分館」(美術資料を特に収集)、「民生分館」(児童書と大人のための子ども教育関係書)、「中崙分館」(漫画)を見学した。各館で本館との関係を質問したが分担収集体制、相互貸借、協力レファレンスはスムーズにしているという回答を得た。この分担収集体制は、いたって合理的であると感じた。台北市は交通が発達しているので、必要ならば専門資料を求めて簡単に行って利用できるし、翌日取り寄せも可能である。特殊資料については重複資料をもつ



三民分館  
「入口付近の掲示板」



三民分館  
「閲覧室」



三民分館  
「あふれそうな美術書コーナー」



民生分館  
「建物全景・図書館は4階」



民生分館  
「入口付近の展示コーナーと検索コーナー」



民生分館  
「児童書の書架と閲覧室」



啓明分館  
「建物全景」



啓明分館  
「1階検索コーナー」



啓明分館  
「視覚障害者用パソコン検索コーナー」



大同分館  
「正面玄関」



大同分館  
「聴覚障害者用資料（「聴障資料コーナー」）」

ことを避け、予算の有効利用を図ろうとしているところは参考になった。第三の点を確認するため、障害者サービスのコレクションを有している「啓明分館」（「松山区」に所在）と「大同分館」（「大同区」に所在）を見学した。「啓明分館」は視覚障害者サービスに特化された分館で規模、設備、資料、サービスの面で非常にすぐれたものであった。「大同分館」は聴覚障害資料を収集していた。国内資料と日本語と主に英語の関係文献を収集していた。「啓明分館」に比べ利用は少ない印象をうけた。多文化サービスは台湾では始まったばかりとのことである。中心になっているのは台北市立図書館で、中でも本館（「総館」）である。本館7階の多文化サービスの閲覧室「多元文化資料中心（センター）」を見学した。日本でも見かけないほどの広いスペースにすばらしい書架と情報機器の設備が備わっていた。7ヶ国の現地語資料が収集されており、印刷資料だけでなくA/V資料にも配慮がはらわれていた。開室して日が浅く、利用者は少ないようであったが、外国人の多い都市であるので、これからの発展は期待できる。まずは広報が必要と思われた。

## II. 台湾の図書館の現在

### 1. 国家図書館について

この図書館は、台湾の国家代表図書館として国内図書館を先導し、欧米、中国を中心に国際機関との協力活動を強化している。組織、業務など広範囲にわたり、本稿ではすべてに触れることはできないので、私が特に興味をもっていた沿革、組織、蔵書構築、利用者サービス（その中でも遠隔サービス）、広報教育文化活動（その中でもeラーニング）の四点について述べる

#### （1）沿革

「国家図書館」の前身は、1933（民国22）年に中国の南京に設立された「国立中央図書館」である。1936（民国25）年に蔣復璁を主任として開館した。日本軍の中国侵略が激しくなり、1940年重慶に移動するが、この間教育部の図書を基礎に多くの貴重な善本を買い足して蔵書を構築した。さらに日本軍の攻撃が増したので、一部の資料を米国に避難させ、それは「米国議会図書

館」に収納された。また一部は香港に避難したが、日本軍に接収され帝国図書館（上野図書館）に保管された。戦後1946年に国立中央図書館は南京にもどり、8月には日本からすべての図書が返還された。新たに貴重な図書が購入され、1947年の時点で善本13万冊、金石拓本1万点、地図1千6百冊、中文図書75万冊、洋書4万冊の蔵書が構築されていた。1948年、故宫博物院の文物などとともに図書も大陸から台湾に移送された。ただし貴重な文献を中心に14万冊ほどであった。1954年から1982年までは、台北市南海路43号の植物園内に位置して、運営され、しだいに業務を拡大した。1981年「漢学研究資料及服務中心（センター）」（現在の「漢学研究中心」）が発足した。1984年附属の「資訊図書館」を設立した。新館が台北市の中心部の台北市中正区中山南路二〇号に建設され、移転した。1996年館名を「国家図書館」に改称し、現在にいたっている。

## （2）組織

この図書館の根拠となっている法律は、「図書館法」（中華民国90（2001）年1月17日）、「国家図書館組織条例」（1996年1月31日）、「国家図書館弁事細則」（2002. 3. 20）などである。「図書館法」第4条で、国家図書館が中央機関によって設立される（「教育部」に所属）こと、政府機関、法人、団体及び研究者を主要な奉仕対象とすること、国内文献の収集、整理、保管に責任をもつこと、文化の保存、学術振興、および全国の各種図書館発展のための研究、協力、指導などを、また第15条で法定納本制度を規定している。機構は「国家図書館組織条例」で定められ、現在館長、副館長、採訪組、編目組、閲覧組、参考組、特蔵組、資訊組、輔導組、研究組で組織されている。また業務については、「国家図書館弁事細則」で細部にわたり規定されている。現在この図書館は、印刷資料とデジタル図書の両方を重視しながら、ハイブリッドな図書館を目指している。

## （3）蔵書構築

### 1) 収集

国家図書館は、「立法院国会図書館」となる法定納本図書館であり、特

に全国図書文献の収集、整理、保存のため、国内出版物に責任をもつ国立図書館である。図書館資料としては国内の図書、雑誌、新聞、視聴覚資料、電子媒体資料、ネットワーク資源を対象としている。同館は1948年以降、国家図書文献の収集、保管にたゆまぬ努力をはらってきた。1954年当時14万冊であった図書は、2005年12月末現在で約219万冊と増加している。そのうち中国書（日本書、韓国書を含む）は約172万7千冊、欧文図書は約46万6千冊である。雑誌は約2万1千種、そのうち中国語誌（日、韓を含む）は約1万5千種、欧文誌は約6千種である。その他、新聞約410種（そのうち中国語紙は約370種）、非図書資料約91万件、電子データベース約270種を所蔵している。年間受け入れ冊数は、約14万冊（件）（そのうち中国図書は約10万）である。

中国古典籍については、台湾でもっとも多く貴重書を所蔵している。写本、版本、「金石拓片」、台湾の「古書契」、台湾の絵葉書などである。特に版本（「刻本」）は、約1万2千部、約13万冊を誇り、その中でも「明版」6千部はこの館蔵書の白眉である。

国家図書館は全国書誌作成機関の役割をはたしている。新刊の図書整理は、「国際標準書誌中心」というセンターで国際標準書誌番号（ISBN）とCIP（Cataloging in Publication）という集中目録作業を行っている

## 2) デジタル化

2002年から始められた蔵書の電子化は、現在急ピッチで進行している。デジタル化の対象となっている資料は次のものがある。古典籍の「善本古籍」（レアブック）、「金石拓片」（金属器、石碑の拓本）、「古書契」（18世紀から日本統治時代にかけての土地などの契約書）、「家譜」（家系図）、図書類で「台湾地区官修地方志」（台湾各地の官製の地方誌など）、「光復初期台湾地区出版図書」、「全国博碩士論文」（博士・修士論文索引と摘要、著作権処理された一部の博士論文全文）、「客家研究図書文献」、新聞雑誌では「台湾地区出版期刊與報紙」（学術的価値の高い新聞雑誌中心）、政府刊行物では「政府公報」、「政府統計」、図像写真では「十九世紀台湾撮影図像」（19世紀西洋人によって撮影された写真）、「日治時期台湾明信片」（日本統治時代の絵葉書）、「日治時期畢業紀念冊」（卒業アルバム）、「愛国奨券」（光復後の宝くじ）、「藝文

海报」(ポスター)、A/V資料としては「电视新闻数位影音」(1962年以後の台湾テレビのイーブニングニュースの電子化したもの)である。

#### (4) 電子図書館サービス

- ①この図書館の蔵書検索のためには、「国家図書館館蔵目録系統」がある。
- ②各種のデジタルコレクションが作成されているが、これらはウェブサイトで公開されている。現在「古籍文献资讯网」「期刊文献资讯网」「政府文献资讯网」「台湾记忆」など10サイトがある。



国家図書館

「1階会議室にて職員よりデータベース検索のプレゼンテーションをうける」



国家図書館

「閲覧室及び吹抜け部分風景」



国家図書館

「善本書室入口付近」



国家図書館

「漢学研究センター内書架」



③ドキュメント・デリバリーサービスが活発に行われている。「遠距図書服務」(Remote Electronic Access/Delivery System)と呼ばれているシステムであるが、1988年に開始された。利用者は、図書館に直接来ることなく、このシステムでさまざまなデータベースをオンライン検索し、全文を閲覧したり、プリントしたりできる。また資料によっては、FAX、郵送、電子メールで入手できる。国内外から年間利用者が40万人を超えている。

### (5)「国家図書館遠隔学園」(E-Learning Campus)

2000年から実施され、現在100ほどのオンライン課程科目をもつEラーニング・キャンパスである。国家図書館と中華民国図書館学会、大学の図書館情報学科、各種図書館が協力して運営している。8課程あるが、主要なものは次の三つである。「図書館利用課程」は、一般大衆、中小学校教員などを対象としたもので、図書館利用教育、情報リテラシー、中国古書などの科目がある。「図書館情報学専門課程」は、図書館員、図書館情報学履修学生などを対象にレファレンス、電子図書館、図書館自動化などの科目がある。「情報科学技術応用課程」は、図書館、博物館、檔案館などの電子図書館構築職員を対象にマルチメディア資料の製作とデジタル資料管理に関する技術、理論についての専門科目を提供している。

## 2. 台北市立図書館について

### (1) 沿革、根拠法規、組織及びビジョン

#### 1) 沿革

台北市立図書館(Taipei Public Library, TPL)の前身は、日本統治時代に台北市に設立された四つの公立図書館である「松山」「城北」「古亭」「城西」である。これらは1930(民国19)年以降に設立され、1952(民国41)年に「台湾省各県市立図書館組織規定」により合併して正式に台北市立図書館となった。現在、「総館」(本館又は中央館にあたる)の他に40分館、12の「民衆閲覧室」(Neighborhood Reading Room)、二つの「知恵図書館」(Intelligent Library)があり、現在2分館が建設中である。所在地は二度変遷したが、徐々

に組織を拡張し、技術革新に合わせてシステムを改編し、国際的な大都市図書館をめざし、また台北市民の壮大な学習センターをめざしている。

「総館」（本館）は、6千余坪、9階建てで本を開いた形の壮大な建物である。本館と分館は情報サービスネットワークで結ばれ、統一された貸借システムと標準化された管理システムが導入されている。利用者は、台北市立図書館のすべての図書館を利用できる「借閲証」を使用する。分館、民衆閲覧室は学校や住宅地に隣接したところに位置しており、コミュニティーにとけこむことに努力している

## 2) 根拠法規

現行の「公共図書館設立及營運基準」（2002. 10. 28）、「台北市立図書館組織規定」（2001. 7. 18）が根拠法となっている。この法規で、公立公共図書館と私立公共図書館について奉仕対象、奉仕内容、人口当たりの職員定数、蔵書量、建築面積など主要基準を規定している。そして公立公共図書館として、国立図書館、直轄市立図書館、県市図書館、郷鎮図書館が分類され、それぞれの基準が規定されている。台北市立図書館は直轄市立図書館として本法規の適用を受けている。

## 3) 現行組織

現在の組織は、館長、副館長、秘書各一人、四課（「採編課」（収集・組織化担当）、「閲覧典藏課」（閲覧・保存担当）、「諮詢服務課」（レファレンス担当）、「推廣課」（対外交渉・協力担当）、六室（「視聴室」（オーディオビジュアル資料担当）、「資訊室」（情報システム担当）、「秘書室」、「人事室」、「会計室」、「政風室」（公務員倫理確立担当）「分館」「民衆閲覧室」から成る。職員数は、325人でその他に守衛9人、技術職と運転手が35人、雇員30人である。この他に、1200余人のボランティアが各図書館に配置されている。組織的な未来展望として、「国際大都会図書館」「国際児童図書館」「青少年図書館」などを建設したいとしている。

## 4) ビジョン

台北市立図書館の優れているところは、経営理念が明確で、自己の図書館サービスについて「目標管理」「品質管理」「達成度管理」を意識的、組織的にやっていることである。単なる意欲だけに終わらせないために、機能別に「主管会報」(管理職会議)、「館務会議」(館運営会議)「I S O (International Standard Office) 推動小組 (ワーキンググループ)」、「館蔵発展委員会」(コレクション構築担当委員会)、「技術服務委員会 (テクニカル・サービス担当委員会)」、「読者服務委員会 (利用者サービス担当)」、「推廣活動委員会 (対外活動発展担当)」、「資訊暨視聽服務委員会 (情報・オーディオビジュアルサービス担当)」、「人力資源委員会 (人材育成担当)」、「為民服務暨年終考核委員会 (利用者サービス・年末評価担当)」、「分館興建規劃暨修建工程委員会 (分館建設計画・維持担当)」の組織を置き、日常的に活動していることである。

## **(2) サービスを支える基盤**

### **1) 多様なコレクション構築**

現在約500万冊(点)の図書を資源として、市民の多様な要求に応えようとしている。限られた予算を有効に使い、均衡のとれた蔵書構成をめざして「館蔵(コレクション)発展政策」が定められている。そしてそれに基づき、出版情報を迅速に入手し、市民の要望を正確に把握し、良質の資料の選書と効率的な購入を行うために「選書小組」(選書グループ)が設置されている。国内外からの個人、団体からの寄贈も積極的に受け入れている。

今後の課題としては、台湾への移民や短期居住者のための多文化資料の充実、地域の郷土資料、レアブック、写本類の収集である。また蔵書に対する評価を厳正にして、今後の蔵書構築政策を刷新することである。

### **2) 特色ある蔵書**

この図書館の一大特色であるが、主題による資料情報サービスを強化するために40館の分館がそれぞれ特色あるコレクション構築に努めている。その分担は、学問分野、資料類型、サービス対象、社会のトピック性などに基づいている。例をあげると、「学校教育」(景美分館)「法律」(木柵分館)「音楽」(西湖分館)「大陸資料」(萬興分館)「原住民文化」(南港分館)「漫画」(中



台北市立図書館  
「総館玄関」



台北市立図書館「総館」  
「1階案内カウンター付近」



台北市立図書館「総館」  
「参考室入口」



台北市立図書館「総館」  
「児童図書館入口」



台北市立図書館「総館」  
「多元文化資料中心（センター）入口」



台北市立図書館「総館」  
「一般閲覧室」

崙分館)「台北市教育出版物」(景新分館)「留学資料」(本館)「欧州文化」(天母分館)「旅行」(王貫英先生記念図書館)「文学」(道藩分館)「台湾史」(建成分館)「園芸」(稻香分館)などである。

### 3) マルチメディア資料

1991年に「視聴覚室」が設置されて以来、台湾の公共図書館の中ではもっとも充実した視聴覚資料を有してきた。それらは16万点にのぼるが、アナログのレコードテープ、ビデオ、フィルム、スライド、デジタルディスク(CD、CD-ROM) VCD、DVD、VODなどがある。教材の類から、音楽、映画などさまざまなものがある。課題としては、利用者の要求が強い視聴覚資料の収集に努めなくてはならないこと、またデジタルマルチメディア機能を強化しなくてはならないことであるという。オンライン・ビデオレコーディングの充実、台北市の古い写真のデータベース作りも課題であるという。

## (3) 利用者サービス

### 1) 利用者中心の閲覧サービス

#### ①一般閲覧

利用者の利便を図るために、長年にわたり資料の開架制、業務の自動化などを推進してきた。開館時間は週78.5時間、国内でもっとも長い(国定の祭日と月一回の図書整理日は休館)。図書館利用カードはどの分館でも利用でき、図書の貸出、返却はどこの館からでも可能である。2004年9月からは、心身障害者、高齢者、繁忙な労働者、遠隔地の利用者に低料金の「書香宅急便」という宅配サービスを開始した。2005年7月からは、RFID技術による自動貸出・返却機を導入した。同年8月からは、期限切れ図書の督促には携帯電話の利用も一部採用した。

近年は、電子情報へのアクセスを保証するため、各種の電子ブックの充実にも努めている。また徐々にオンライン閲覧も可能になりつつある。

#### ②遠隔利用サービス

本館に所蔵していない資料については、申請書を出せば、国内、国外およ

び中国の上海図書館から必要資料の複写、貸出サービスを受けることができる。

## 2) 積極的なレファレンスサービス

### ①一般レファレンス

本館の参考室と各分館のカウンターで参考業務が行われている。来館、電話、FAX、オンラインで受け付けている。参考資料としては、中国語、欧文（特に英語）の各種参考図書、オンライン・データベース（「大英百科全書」「中華民国期刊論文索引」「米加博碩士論文索引摘要」「科学月刊」など）があり、どの分館からでも利用可能である。その他として、マイクロ資料、政府公報、「国家考試試題」（国家試験問題集）などが備置されている。

### ②図書館利用指導

日常的に各種の図書館利用研修課程が設けられている。これらには、参考図書の紹介・利用、データベースの紹介・利用、ネットワーク資源の利用、図書館資料の検索法などである。

### ③生涯学習の支援

社会の急速な変化、知識情報の爆発的増加は、人々に生活面でも仕事の面でも不断の学習を必要とさせている。台北市立図書館は、これを支援するために「台北市終身学習護照」を発行し、学習を奨励している。また生涯学習のための情報提供のために『台北市終身学習網通訊』（季刊）を発行している。さらに「台北市立図書館終身学習網站」は、他の生涯学習機関へつながるポータルサイトであり、随時豊富な教材資源を検索し、利用することができる。

## 3) 児童サービス

児童サービスはどの分館でも大なり小なり行われているが、蔵書と施設がもっとも整っていて、活発な活動をしているのは本館と民生分館である。

①本館の地下2階に「小小世界外文図書館」という児童図書館が設けられている。中国語と主に英語の資料（図書、さまざまな視聴覚資料、マルチメディア

ア資料など)が集められている。特徴は、国際化対応のため、外国語資料として英語資料を集中して集め、児童、青少年の英語での読み、書き、会話の能力を養うことを追及していることである。

②「民生分館」の蔵書は、ほとんどが児童書及び育児関係の図書から構成されている。ここでは、図書の貸借、複写、レファレンス業務、図書館見学、集会室の提供、「終身学習護照」(生涯学習パスポート)の提供などのサービスが行われている。

#### 4) 障害者サービスの充実

障害者の読書権を保障するために、また肉体的ハンディキャップ、言語や文化の違いからくる壁をなくすために、さまざまな資料をそろえ、読書環境を改善するために努力がはらわれている。聴覚障害関係資料を集めた「台北市立大同分館」がある。「台北市立啓明分館」は視覚障害者のための専門図書館として資料、設備、サービス面で台湾においてもっとも優れている。公共図書館でこれだけの設備をもち多彩なサービスを行っている公共図書館は日本でもあまり例を見ないと思われる。

「啓明分館」は、松山区の敦化北路155巷76号にあり、広い敷地に4階建の建物を備えている。一般図書のほか、視覚障害者用資料として録音図書、点字図書、大活字図書、電子図書(一般電子図書、点字電子図書、有声電子図書)を収集している。機器として、拡大機、点字読書機、盲人用パソコンがある。図書の貸出(一般図書は一度に5冊で30日以内視聴覚資料は2件で60日以内、視覚障害者用資料は30冊を限度に60日以内)とレファレンスは、郵便、電話、インターネット、来館によって行われている。また専用回線を通じて、無料で新聞のリーディングサービスを提供(一人一度に20分以内)、日常生活に必要な情報や学習資料を録音で提供している。さらに2002年からは、全国の視覚障害者に必要な資料を無料で宅配サービスを始めた。毎月二回読書会が開かれている。視覚障害者のため毎月録音テープか光ディスクの形で無料で生活情報を提供する『啓明の音』とよぶ雑誌が刊行されている。

## 5) 多文化サービス

台北市は国際都市であり、また近年移民や短期居住の外国人が増加したために、2007年より本館に「多元文化資料中心（センター）」を設置し、サービスを開始した。入口の窓に「閲読・多元、文化・交流、尊重・融合、希望・成長」というすばらしい標語が掲げられている。

このセンターでは、国別にコレクションを形成している。現在、韓国、ベトナム、インド、インドネシア、マレーシア、フィリッピン、タイ、ミャンマーのコーナーが別々に設けられ、歴史、伝記、心理、芸術、言語文学、健康保険、家政、レジャー、旅行などの主題の原語資料（図書、参考図書、児童書、新聞、雑誌、視聴覚資料など）が収集されている。母国情報だけでなく、台湾での生活に必要な行政情報、医療、福祉情報及び中国語学習教材などが備えられている。開架式で館内閲覧のみに限られている。閲覧以外では、レファレンス（電話、メール、郵便でも可）、利用教育、講座、展示会、研修会などが行われている。運営は主にボランティアに頼っていた。

### （4）多彩な文化活動

#### 1) 読書運動

1999年より、児童、青少年の読書の質を高め、普及するために「好書大家讀」（皆が良い本を読もう）というプログラムを採用している。また良書を表彰し、『好書指南』（良書ダイレクトリー）を発行することにより、児童、学校教師、父兄の読書を助けている。

#### 2) 文化活動

この館の広報紙『市図之窗』には、毎月行われる本館、分館の「芸文活動」が150ほどのっている。市民講座（作家講座など）、映画会、展示会（絵画、書道など）、英会話講座をはじめ多くのプログラムが用意され、活発に開催されている。これは市民と図書館との接点を広げ、深めることにおおいに役立っているようだった。



## おわりに

今回瞥見程度に過ぎない台湾の図書館の探訪であったが、学ぶことが多かった。また図書館現場の職員から多くの元気をいただいた。ここでは特に考えさせられた点を三つだけあげておきたい。

第一点は、日本でも現在喫緊の課題である電子化の問題である。現在台湾では、台湾全体のデジタル・アーカイブが国家的規模で進展し、図書館界でも電子化が急激に発展していることである。たとえば2000年に始まった政府の5ヵ年計画の「数位典藏国家型科技計画」(National Digital Archives Program)など典型的なものだ。これは国家規模でコンテンツ、テクノロジー、アプリケーションなどの発展を図り、ナショナル・デジタル・アーカイブを構築するもので、国家図書館も学会、大学、博物館などの主要機関とともに参加している。台湾は小地域とは言え、国家規模で200近いウェブサイトが含まれているのはうらやましい限りだ。

国家図書館だけみても、デジタルコレクションの構築面で中国語文献と台湾の歴史史料の蓄積に力を入れ、国内の関係機関だけでなく、外国の図書館とも共同で作業を進めていることである。特に国家図書館は米国の議会図書館をはじめ外国の図書館との共同デジタル化作業に積極的に取り組んでいることは注目すべきことと思う。その場合、デジタル化計画が綿密にたてられ、国家の支援を十分に受けて推進されていることも重要な点である。

第二は、利用者サービスに関することである。特に国家図書館、国立図書館、公共図書館では、利用者本位の改善があらゆる面で日々図られている。この改善のために、ビジョンの明確化とマーケティングの重要性が掲げられている。この点は日本では認識が非常に弱い部分であろう。中でも近年は、マーケティングへの認識の必要が強調されるようになった。特に台北市立図書館は、利用者のニーズを積極的に把握し、各種サービス面で利用者本位の姿勢を貫こうとしていて注目に値する。ここには、マーケティング理論と実践があると思うが、これを近年強力にリードしているのが曾淑賢台北市立図書館長であった。その詳細については、本紙掲載の曾館長の論文「公共図書館の創造マーケティング」によく表れていると思う。

第三は、台湾をはじめアジアの図書館に目を向けたいということである。

日本では欧米先進諸国の図書館研究は盛んであるが、アジアの図書館についての研究や紹介はきわめて少ない。おそらく「日本の図書館より遅れている国の図書館を何でことさら」という意識が働いているからであろう。しかし今中国、シンガポールを先頭にアジアの図書館は大きく発展しつつある。台湾を見てもこの10年間国家図書館、公共図書館の発展にはめざましいものがある。その中で参考にすべき点も多いように思う。日本の図書館は、これからは「図書館先進国」に「学ぶ」という観点だけでなく、同時にアジアの図書館と「共に協力」して「共に発展」していくという、いわば「協働」の姿勢をもつ必要があるのではなかろうか。資料の電子化、資料保存、資料の相互貸借など協力できるところはますます大きくなっていると思えるのだが。

## 参考文献

[日本語文献]

<図書>

宇治郷毅「台湾の図書館」『近代日本図書館の歩み 地方編』日本図書館協会、1992

<雑誌>

岩猿敏生「台湾の図書館」『図書館雑誌』第75巻第7号、1981. 7、pp.402-404

岩猿敏生「台湾の大学図書館」『大学図書館研究』19号、1981. 11、pp.76-79

国分 信「台湾専門図書館管見のあとさき」『図書館雑誌』第75巻7号、1981. 7、p.405

高橋正美「UDCの源流をたずねて—台北帝国大学図書館におけるUDCの採用と廃止—」『ドクメンテーション研究』31巻11号、1981. 11、p.474-482

高橋正美「台湾図書館訪問記」『ドクメンテーション研究』第33巻第2号、1983. 2、pp.98-102

中田敏夫「国立台北師範学院日文図書の歴史 附同学院蔵戦前台湾関係文献目録」『国語国文学報』第57集、1999. 3、pp.68-88

Ke Hao-Ren 著、澤田裕子訳「アジア諸国における情報サービスの利用（1）台湾 CONCERT について」『情報管理』第47巻第5号、2004. 8、pp.305-314

- 富田 哲「文献・史料発掘 国立中央図書館台湾分館」『植民地教育史研究年報』8号、2005、pp.194-199
- 田中玄経「資料探訪 台湾文書館利用案内—国立故宮博物院・図書文献館と中央研究院・傅斯年図書館」『広島東洋史学報』10号、2005、pp.103-107
- 住吉朋彦「台湾大学図書館」『文学』第6巻第6号、2005、11、pp.136-141
- 高橋 智「故宮博物院と国家図書館（台北）」『文学』同上書、pp.131-135
- 松浦 章「書見台 国立中央図書館台湾分館の日本関係資料」『関西大学図書館フォーラム』12号、2007、pp.30-36

[中国語文献]

<図書>

- 『中華民国 図書館年鑑』各年版、国家図書館
- 曾堃賢『日拠時期（1895-1945）台湾区公共図書館事業之研究』国家図書館、2003、10、78p
- 廖又生『法律、管理與図書館』国立中央図書館台湾分館、2004、169p
- 『歴久備新 新館營運週年特刊』国立中央図書館台湾分館編印、2005、286p
- 『国立台中図書館服務指南』国立台中図書館、2006、52p
- 『台北市立図書館年刊 95年度』台北市立図書館、2007
- 『台北市立図書館簡介』台北市立図書館、2007、43p
- 『国家図書館館藏資料數位化簡介』国家図書館、2007
- 『国家図書館特藏資料選輯』国家図書館、2007
- 『本土化、數位化與全球化的国家図書館』国家図書館、2007
- 『国家図書館遠距学園簡介』国家図書館、2007

<雑誌論文>

- 王振鵠「百年来的台湾図書館事業」『図書與資訊学刊』第63期、2007、11、pp.1-10
- 宋建成「台湾公共図書館史」『図書與資訊学刊』第63期、2007、11、pp.36-46

<欧文>

- 『National Digital Archives Program 2006』National Digital

Archives Program Office, 2006, 80p

<ウェブサイト>

国家図書館；<http://www.ncl.edu.tw>

国立中央図書館台湾分館；<http://ntl.edu.tw>

国立台中図書館；<http://www.ntl.gov.tw>

台北市立図書館；<http://www.tpml.edu.tw>

数位典藏国家型科技計画；<http://ndaporg.tw>

(うじごう つよし。同志社大学社会学部教授)